

第16回「アマチュア・アンサンブルの日♪」 出演者決定!!

AOIは世界的な音楽家だけでなく、アマチュアにも開かれたステージ！
演奏することの喜びをみんなで楽しもう♪



11/23 (月・祝)
無料 (申込不要)
12:00開演
(11:30開場) ※18:00終演予定
未就学児からご入場いただけます。

第1部 12:00開演

N&N (ヴァイオリン、ピアノ、チェンバロ)
kimie&maco (フルート、ピアノ)
えりあや (クラリネット、ピアノ)
アラウンド フィフティーズ (歌、ヴァイオリン、ピアノ)
Tomy Quartet (リコーダー、チェロ、ピアノ)
Trio Pont de Cerisier (サクソフォン、フルート、ピアノ)
MAIUS TRIO (ヴァイオリン、サクソフォン、ピアノ)
ムジカ・ブリューム (弦楽合奏、ピアノ)

第2部 13:50開演 (予定)

長唄三味線ひきだるまの会 (長唄三味線)
サバーイデューオ (ヴァイオリン、チェロ)
常盤トリオ (ヴァイオリン、チェロ)
アンサンブル・ヴァン・ルージュ
(フルート、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ)
リコーダーアンサンブル フランターレ
リコーダーアンサンブル「つくつくぼうし」
富士リコーダーオーケストラ

第3部 15:40開演 (予定)

ミチコとヨーコ (フルート、アルト・フルート、ピッコロ)
アンサンブルYM (フルート、クラリネット)
パーシモンズ (サクソフォン三重奏)
ロコ・ポール・ムジカ (フルート四重奏)
志太ウインドアンサンブル (木管アンサンブル)
長興寺木管五重奏団
プラス・アンダンテ静岡 (金管五重奏)
アンサンブル・デ・ラフェイム (サクソフォン八重奏)
プラスパティエナ (金管アンサンブル)

チケット発売情報!!

以下のコンサートは**10月10日(土)**よりチケット発売！(静岡音楽館倶楽部会員先行発売10/3(土)より)

子どものためのコンサート 0歳児からの ファミリー・ コンサート Vol.11

定員300名 1階席のみ

2027年**2/14**(日)
10:30開演
(10:00開場) ※11:30終演予定
自由席300円
18歳以上の方のみでの入場不可



出演：とこたんデクテット・トコタンズ
(常葉大学短期大学部音楽科・保育科)

曲目：どんな色が好き
ぼよん行進曲
アンパンマンマーチ
「となりのトトロ」メドレー

※このコンサートは、休憩はありません。
※未就学児もご入場いただけます(チケットが必要です)。
※チケットは静岡音楽館AOIのみで販売します。
※静岡音楽館倶楽部会員割引はありません。

オルガン¥500 コンサート スプリング・コンサート 澤 菜摘

2027年**3/22** (月・休)
14:00開演
(13:30開場) ※15:00終演予定
自由席500円 [Pコード=316-478]
未就学児入場不可

出演：澤 菜摘 (オルガン)

曲目：
E.エルガー：愛のあいさつ op.12
J.S.バッハ：小フーガト短調 BWV578
S.カルク＝エラート：かわいいワルツ op.142-2
M.デュリュフレ：
〈来たれ創り主なる聖霊よ〉による
コラール変奏曲 op.4
R.ロジャース：
ミュージカル《サウンド・オブ・ミュージック》より〈私のお気に入り〉
A.ポロティン：
だったん人の踊り(歌劇《イーゴリ公》より)
G.ホルスト：組曲《惑星》op.32 より《木星》
A.ギルマン：見よ、勇者は帰る (G.F.ヘンデル：《ユダス・マカベウス》の主題によるバラフレーズ) op.90-16

※このコンサートは、休憩はありません。
※静岡音楽館倶楽部会員割引はありません。



静岡音楽館倶楽部会員の皆さまへ

お名前、ご連絡先、銀行口座等、ご登録内容に変更が生じた場合は、速やかに下記までご連絡ください。なお、2026年度をもって退会をご希望の方は、2027年2月末日までに、静岡音楽館倶楽部事務局へ退会届をご提出ください。ご提出のない場合は自動更新となりますので予めご了承ください。

静岡音楽館倶楽部 法人会員 (2026年9月末現在) 50名

- (株)アオイテレック
- (株)ジェイアール東海ホテルズ
- (株)SBSプロモーション
- ホテルアソシア静岡
- かわした歯科クリニック
- (株)タミヤ
- (株)メディア・ミックス静岡

コンサートシリーズ2026-27

主 催 静岡音楽館AOI 指定管理者(公財)静岡市文化振興財団

特別協賛  せい いん

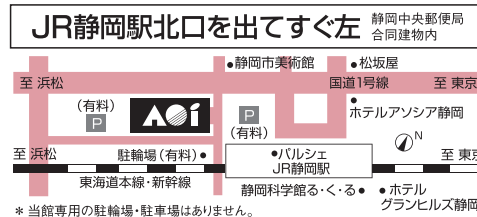
協 賛  アイワグループ
 HIDEAWAY STUDIO

次のことを予めご了承の上、 チケットをお求めください。 皆様のご理解・ご協力をお 願いいたします。

※価格は税込です。
※都合により内容を変更する場合があります。
※お客様のご都合によるチケット代の返金、座席の変更はお受けできません。
※演奏中のご入場、および他のお客様の鑑賞の妨げとなる行為は固くお断りいたします。
※未就学児はご入場いただけません。(一部公演を除く)
※託児サービスはございません。

開場時の諸注意

※8階ホールへのエレベーターの運行は、開場時間以降となります。
※開場時は1階エレベーター前でお待ちの方を優先してご案内いたします。
※地下からご来場のお客様も、一旦1階にて列にお並びください。



CONCERT HALL SHIZUOKA
静岡音楽館 AOI

月曜日休館 (ただし祝日開館、翌平日休館) 9:00～21:30開館
〒420-0851 静岡市葵区黒金町1番地の9

お問 合 せ

054-251-2200

静岡音楽館AOI 検索



AOI 通信

静岡音楽館倶楽部情報誌
SEP. 2026 No.123

秋号

メッセージ 上野耕平 (サクソフォン奏者、静岡音楽館AOI企画会議委員) 劇音楽《アルルの女》全曲

第30回「静岡の名手たち」
オーディション合格者によるコンサート
出演者からのメッセージ

AOIを支える人々
安達正浩 (チェンバロ製作家・調律師)

「新しいAOIのガラ・コンサート 祝宴」
公演レポート

第16回「アマチュア・アンサンブルの日♪」
出演者決定!!

チケット発売情報!!

メッセージ 上野耕平

（サクソフォン奏者、静岡音楽館AOI企画会議委員）



©Yuji Ueno

ビゼーの代表作の一つ「アルルの女」。コンサートでの演奏はもちろん、TV番組で使われたり、学校の授業で聴いたり。今日我々が親しんでいる組曲「アルルの女」は、第一組曲がビゼー本人、第二組曲がビゼーの友人であるギローの手によってのちに作られたもの。と言うのはクラシックファンであれば知る人は多いことだろう。ではいったいどのぐらいの方が、その元となった劇付随音楽「アルルの女」をお聴きになったことがあるだろうか。

組曲版でのリッチで華やかな響きとは違う、素朴で郷愁を誘う小編成なオーケストレーション。どこからともなく聴こえてくる合唱の響き。組曲版では一度しか出てこなかった旋律が実は劇の中では重要なモチーフとして何度も登場したりなど。

きっとこれを聴いていただけたら、組曲版を聴いても見える景色がこれまでと違って更に深くドラマティックになるに違いない！

今回、日本を代表する超豪華な音楽家の方々にAOIに集結していただき実現するこのコンサート。

企画会議委員として最初の企画にこのコンサートを開催できることを大変嬉しく思う。

これを聴かずして「アルルの女」は語れぬ。AOIの極上の響きと共に楽しみください。

アルルの女

R.シュトラウス：歌劇《ナクソス島のアリアドネ》(2025) 静岡音楽館AOI



撮影：日置真光

静岡祝祭管弦楽団

(Shizuoka Festival Orchestra)

静岡音楽館AOIのため、そのときどきで組織されるオーケストラ。1995年の開館にあわせ、いまの富士山静岡交響楽団と静岡の弦楽合奏団アンサンブル・ドゥムカのメンバーなどにより編成（第1次）。95年は天沼裕子*が指揮し、W.A.モーツァルト：交響曲第41番《ジュピター》ハ長調 K.551 ほか、96年は原田幸一郎の指揮でJ.ハイドン：交響曲第101番《時計》ニ長調 Hob.1-101 ほかを演奏した。

2025年、開館30周年を記念したR.シュトラウス：歌劇《ナクソス島のアリアドネ》op.60 のため、沼尻竜典*の指揮のもと、ソリストや首席奏者たち、そうそうたる38人が集結（第2次）。コンサートマスターに水谷晃、次席に小林吉成、東京交響楽団のコンサートマスター、前/現のふたりが並んだ。2026年、サクソフォン奏者の上野耕平*のプロデュースによるG.ビゼー：劇音楽《アルルの女》op.23 のために再編成（第2.2次）、ひき続き沼尻竜典が指揮し、水谷晃がコンサートマスターを務める。合唱にびわ湖ホール声楽アンサンブル、ナレーションに春日井一平（SPAC-静岡県舞台芸術センター）を迎える。

* 静岡音楽館AOI企画会議委員

びわ湖ホール声楽アンサンブル(2016) 静岡音楽館AOI



撮影：日置真光

びわ湖ホール声楽アンサンブル

全国から厳しいオーディションを経て選ばれた声楽家により構成される日本初の公共ホール専属声楽家集団。ソリストとしての高水準の実力だけでなく、アンサンブル、合唱の中核となり得る優れた声楽アンサンブルとしても多方面から注目を集めている。びわ湖ホール独自の創造活動の核としてびわ湖ホール開館の年の1998年3月に設立。びわ湖ホール自主公演への出演を主な活動とし、オペラ公演や定期公演を行うほか、依頼を受けて全国各地でも多数の公演を行っている。また、滋賀県内の学校を対象とした公演を行うなど、音楽の普及活動にも積極的に取り組んでいる。現在までに在籍したメンバーは総勢80名にもおよび専属活動期間を終了後は「ソロ登録メンバー」として、びわ湖ホールの自主公演に出演するほか、国内外の数多くのコンサートやオペラに出演するなど幅広く活躍している。

《アルルの女》あらすじ

そこカストゥルはフランスの南、プロヴァンスの小さな村。そのあたりの地主の、りっぱな農家がある。壁は栗色、葡萄の蔦が赤い屋根にまで絡まっていて、鋤とか鋤とかが散らかっている。庭先には大きな樹が並び、その向こうにはローヌ河。犬も吠えず、鳥も啼かず、驟馬の鈴さえも聴こえない。まわりはあまりに静かだ。

村の青年フレデリは、アルルの闘牛場で出逢った女に激しく恋をしている。しかし彼女はある男の愛人だった……。真実を知ったフレデリは一度は彼女を諦めようとするものの、その面影を忘れることができず、心身ともに衰弱していく。苦しみの果て、彼は幼なじみのヴィヴェットと結婚する。やがて聖エロアの祭の日、ふたりの婚礼を祝う宴。笛や太鼓の音楽がにぎやかに奏でられ、どんどん高潮してゆく。しかし、フレデリの心に眠っていた嫉妬と執着がよみがえる。必死に忘れようとしながらも苦悩は深まり、ついに耐えきれなくなる。彼は、窓から身を投げ自らの命を絶ってしまう。

Size 1 L'Arlésienne

劇音楽《アルルの女》全曲

12/12 土 16:00開演（15:30開場）

指定席6,000円（静岡音楽館倶楽部会員5,400円）
〔Pコード＝316-470〕

22歳以下
¥1,000

出 演

沼尻竜典（指揮）

静岡祝祭管弦楽団（コンサートマスター：水谷晃）

水谷晃、蔵川瑠美、坪井きらら、須貝万紀、山本はづき、小林玉紀、伊東翔太（ヴァイオリン）、田原綾子（ヴィオラ）、服部誠、室野良史、矢口里菜子、西田翔、増山頌子（チェロ）、幣隆太郎、本間達朗（コントラバス）、八木瑛子、和田桃子（フルート/ピッコロ）、荒木奏美（オーボエ/イングリッシュホルン）、中館壮志（クラリネット）、皆神陽太、古賀朝也（ファゴット）、上野耕平（アルト・サクソフォン）、高橋将純（ナチュラル・ホルン）、濱地宗（ホルン）、秋生智之（ティンパニ/プロヴァンス太鼓）、高橋優介（ピアノ）、下村景（ハルモニウム）

びわ湖ホール声楽アンサンブル

黒田恵美、船越亜弥（ソプラノ）、大垣加代子、森季子（アルト）、島影聖人、古屋彰久（テノール）、市川敏雅、内山建人（バス）

大川修司（合唱指揮）

春日井一平 SPAC-静岡県舞台芸術センター（ナレーション）

曲 目

G.ビゼー：劇音楽《アルルの女》op.23（全3幕）

※脚本は書き下ろしです。

〔助成〕公益財団法人ローム ミュージック ファンデーション

〔協力〕SPAC-静岡県舞台芸術センター



©Ayane Shindo

出演者の皆さまから、読者の皆さまへメッセージが届きました！

リコーダーの音色を最高の響きにしてくれる、素晴らしいAOIのホールで大好きなリコーダーを演奏できる機会をいただき、本当に嬉しいです。まだまだ勉強中の身ですが、今の僕にできる一番の演奏を皆様に聴いていただけるように、演奏会本番まで頑張って練習に取り組みたいと思っています。

皆様と音楽を共有できる秋のひとときを心から楽しみにしていますので、どうぞ応援よろしくお願いいたします。

高山善士(リコーダー)



この度は素晴らしい演奏会に出演する機会をいただき大変光栄に思います。

今回演奏するクライスラー作品の2曲は私が好きな曲でもあり、思い入れがある曲です。そのような曲をこの静岡音楽館AOIの響きの素晴らしいホールで演奏できることを心から嬉しく思います。対照的な2曲の良さを皆様にお伝えできるよう心を込めて演奏したいと思います。

剣持まい(ヴァイオリン)



伊東市で育ち、その後イギリスに6年間滞在し、オペラ劇場の現場で研鑽を積んでまいりました。帰国後、初めて静岡県に腰を据えて音楽活動を始めた今、県のある静岡市でこのような機会をいただけることは、大きな励みです。これから伊東や県東部、そして静岡県全体の音楽文化を少しでも活性化していけるよう、精一杯努めてまいります。当日は、英国のシェイクスピアにまつわるプログラムをお届けしたいと思います。

濱野杜輝(バリトン)



このたび、「静岡の名手たち」オーディション合格者によるコンサートに出演させていただけることを、大変嬉しく思っております。

今回は、G.ヴェルディの2つのオペラから、それぞれ1曲ずつ演奏いたします。それぞれ異なる作品の魅力や登場人物の心情を、音楽を通して感じていただけるよう心を込めて演奏いたします。

皆様と会場で素敵なひとときを共有できますことを、心より楽しみにしております。

殿岡かなみ(メゾ・ソプラノ)



「静岡の名手たち」オーディションに合格し、このコンサートに出演することは僕の目標の一つであったため、大変嬉しく思います。

今回、イタリアの作曲家であり、映画音楽の巨匠でもあるニーノ・ロータの作品を選曲しました。この曲は、いわゆる『冗談音楽』と呼ばれるもので、全4楽章を通して様々な楽曲のパロディが多彩な技法と表現、オーケストレーションによって奏でられます。

演奏は第1楽章のみですが、大好きなAOIの響きを全身で感じながら、全力でソロ・コントラバスの魅力を皆様にお届けします。ぜひお楽しみください!!

松下祐信(コントラバス)



このたびは、このような素晴らしい演奏の機会をいただき、大変光栄に思います。

今回演奏させていただくりスト編曲の《ファウスト》のワルツは、多彩な表現の可能性を秘めており、弾くたびに新たな発見やアイデアが生まれる、非常に魅力的な作品です。オペラならではの華やかさや重厚感、そして声楽的な表現に少しでも近づけるよう、試行錯誤を重ねながら取り組んでおります。

AOIという素晴らしい空間で、大好きなこの作品を皆様と共有できることを心より楽しみにしております。

大木健助(ピアノ)



この度、「静岡の名手たち」オーディションに合格、さらにロダン賞という素敵な賞もいただくことができ、大変嬉しく思います。

今回演奏させていただく《線VI》という作品は、東洋の書道における「線」のあり方が音楽によって追求されています。ひとつひとつの音と、音のない空間とが生み出す世界に、この作品の大きな魅力を感じています。静岡の皆様に演奏をお届けできる喜びを胸に、打楽器ならではの多彩な音色や表現の可能性を感じていただけるよう、精一杯演奏いたします。

会場で皆様にお会いできることを楽しみにしております！

大沼花音(打楽器)





このたび、このような演奏の機会をいただき、大変嬉しく思っております。幼少期から静岡県で育った私にとって、静岡音楽館AOIは特別な場所であり、このホールで皆様音楽をお届けできることを大変光栄に思います。

今回は、F.マルタン作曲 8つのプレリュードより2曲と、F.リスト作曲 愛の夢 第3番を演奏いたします。異なる時代や作風をもつ2つの作品ですが、それぞれが持つ豊かな色彩感や、時代ごとの音楽観、情感の移ろいを感じていただけましたら幸いです。

須藤あゆみ(ピアノ)



静岡にゆかりある新進音楽家たちの競演———
2026年5月9日、10日に開催された
第30回「静岡の名手たち」オーディションでは、
30回の節目を記念して全7部門を実施し、見事8名の合格者が選ばれました。
静岡にゆかりのある若き音楽家たちの“いま”を感じられる演奏に、どうぞご期待ください。

静岡室内楽フェスティバル2026

第30回

静岡の名手たち

オーディション合格者によるコンサート

10/31土

15:00開演 (14:30開場)

自由席 ¥ 2,000 (静岡音楽館倶楽部会員 ¥ 1,800) [Pコード=316-467]

22歳以下
¥1,000

高山善士 (リコーダー)、遠藤慶子 (チェンバロ)
G.Ph.テレマン：リコーダー・ソナタ ハ長調 TWV41:C5

剣持まい (ヴァイオリン)、杉山恵理子 (ピアノ)
F.クライスラー：ドヴォルザークの主題によるスラブ幻想曲
M.d.ファリャ：スペイン舞曲 第1番 (F.クライスラー 編)

松下祐信 (コントラバス)、木村七重 (ピアノ)
N.ロータ：コントラバスと管弦楽のための協奏的ディヴェルティメント 第1楽章 Allegro

大木健助 (ピアノ)
C.グノー／F.リスト：歌劇《ファウスト》のワルツ S.407, R.166

大沼花音 (打楽器) ロダン賞
細川俊夫：線VI 打楽器のための

須藤あゆみ (ピアノ)
F.マルタン：8つの前奏曲 第5、8番
F.リスト：愛の夢 第3番 変イ長調 S.541, R.211

濱野杜輝 (バリトン)、久米涼子 (ピアノ)
G.フィンジ：《花輪をささげよう》op.18 より 第3曲〈もはや灼熱の太陽も怖れるな〉
G.ヴェルディ：歌劇《オテロ》より〈無慈悲な神の命ずるままに〉

殿岡かなみ (メゾ・ソプラノ)、森真実 (ピアノ)
G.ヴェルディ：歌劇《ドン・カルロ》より〈美しき園にて〉
歌劇《オペルト、サン・ボニファチ伯爵》より〈誰が思い出を戻してくれるのか〉



安達正浩さん (チェンバロ製作家・調律師)



静岡音楽館AOIは、フレンチ・タイプの2段鍵盤型のチェンバロを所有しています。その華やかな姿と煌びやかな響きは、これまで多くの人々を魅了してきました。しかし、その音色は楽器だけで生まれるものではありません。演奏会ごとに作品や時代に合わせて調律を行い、最高の状態へ整える「チェンバロ調律師」の存在があつてこそ、本来の響きが生まれます。

今回は、AOI開館当初からチェンバロを支え続けているチェンバロ製作家・調律師の安達正浩さんに、チェンバロ調律の魅力や仕事への思いについてお話を伺いました。

チェンバロ調律師とは？ピアノ調律と異なる点は？

チェンバロ調律師は、その名のとおりチェンバロという鍵盤楽器の調律や調整を行う仕事です。では、ピアノ調律師との最も大きな違いはどこにあるのでしょうか。

安達さんが挙げたのは、「音律」を選ぶことでした。「常に同じ調律を施すのではなく、演奏するプログラムや作曲家、作品に合わせて最適な音律(※)を選び、調整するのがチェンバロ調律の難しさであり、楽しさです。チェンバロでは、平均律はもちろん、中全音律(ミントーン)やキルンベルガーなど、さまざまな音律が用いられます。例えば16～18世紀のイタリアやイギリスの作品、あるいはバッハが活躍したバロック時代の作品では、それぞれの時代や作曲家にふさわしい音律を選択することで、調ごとの個性や響きの美しさを引き出すことができます。こうした音律の選択も、チェンバロならではの重要な仕事です。私たち調律師は、演奏者と相談しながら、その公演に最もふさわしい響きをつくり上げていきます。」

音楽史や楽器への深い理解、そして経験に基づく判断こそ、チェンバロ調律師ならではの専門性と言えるでしょう。

※音律…音の高さの関係をどのように決めるかという「音の並べ方のルール」のことです。同じドレミファソラシドでも、音と音の間隔の取り方によって、和音の響きや調(長調・短調)の印象が変わります。

チェンバロとの出会い、そして調律師への道のり

「調律師」と聞くと、音楽大学や専門学校で学び、その道へ進むことを想像される方も多かもしれません。しかし、安達さんは音楽大学の出身ではありません。大学では物理学を学ぶ一方、友人が所有していたチェンバロとの出会いをきっかけに「古楽研究会オリゴ・エト・プラクティカ」へ入り、古楽の世界へ足を踏み入れました。

研究会では、古楽器やその時代に即した演奏法を学びました。当時はこうした歴史的奏法を学ぶ機会はまだ珍しく、古楽の研究が広がり始めたばかりの時代だったそうです。また演奏法だけでなく、自ら古い調律法についても研究を重ね、学生時代から発表会の調律を任されるようになりました。その経験が、現在の仕事へとつながっています。

大学院修了後はチェンバロ製作工房で経験を積み、30歳でフランスへ渡ります。現地では製作家として研鑽を積む一方、調律師としても活動を続けました。またAOIのチェンバロを製作した吉田令氏のフランスの工房を借りて製作を行う機会にも恵まれました。さらに、電子楽器メーカーKORGの古典調律用チューナー開発の際には、チェンバロ用音律の監修、性能試験等に協力。そのチューナーは現在、世界中の演奏家に広く利用されています。

夢は「チェンバロ博物館」

製作家としての安達さんには、長年温めている夢があります。それは、時代や地域ごとのさまざまなチェンバロを製作・收藏し、演奏家へ貸し出す、その名も「チェンバロ博物館」をつくることです。

「例えばイタリア・ルネサンスの作品なら、その時代の楽器で本番まで練習してもらい、演奏会が終わったら返却していただく。必要であれば、その楽器についてレクチャーもできたら面白いですね。」

建物を持つ博物館ではなく、楽器そのものが全国を巡り、それぞれの作品にふさわしい音色を届ける“動く博物館”を思い描いているそうです。

コンサートにおける調律師の役割とは？

最後に、「コンサートにおける調律師の役割とは何か」と伺いました。

「“存在がないこと”ですね。演奏者が調律のことを考えなくても、自分の音楽だけに集中でき、リハーサルや本番を迎えられる。それが一番理想だと思っています。

そのために、ホールの皆さんには温度や湿度、照明による変化も考慮しながら、事前に楽器を十分に環境へなじませ、最も安定した状態に導いていただくようお願いしています。」

舞台の上に立つことはありませんが、演奏会の成功を陰で支え続ける調律師。その「存在を感じさせない仕事」こそが、安達さんのプロフェッショナルとしての哲学でした。

聞き手・文：山本れいな
(静岡音楽館AOI 学芸員)



2026年5月30日(土) 「新しいAOIのガラ・コンサート 祝宴」 公演レポート



いよいよ始まった村治佳織芸術監督による新シーズン。第1弾「ガラ・コンサート“祝宴”」は、村治芸術監督のほか、企画会議委員の幸田浩子(ソプラノ)、上野耕平(サクソフォン)、田中傳次郎(歌舞伎囃子)、そして2026-27年度のレジデンシャル・アーティストを務めるピアニストの大瀧拓哉が出演。さらに小尻健太(ダンス)、藤間礼多(日本舞踊)をゲストに迎え、豪華絢爛な幕開けとなった。

「西洋と日本の文化が行き来する、これまでに体験したことのない演奏会」とでも言おうか。当日まで、どんな公演になるのかまったく予想できなかったのだが、いざ幕が開けてみると時間を忘れて没入した。

オープニングは、村治佳織の《バガモヨ〜タンザニアにて》。村治のギターに誘われ、瞬く間にかの地へと意識が飛んでしまった。田中傳次郎と長唄囃子による素演奏〈三番叟〉では、日本の伝統楽器の音圧と、原色の鮮やかさに圧倒される。

上野耕平による旭井翔一《エクローグ(田園詩)》は情感たっぷり、ピアノと会話するように奏でられた。今回伴奏者として最も出番の多かった大瀧拓哉は、ソロ演奏、リスト／ヴォロドス編《ハンガリー狂詩曲第13番》で、打ち上げ花火のように鮮烈な超絶技巧を聴かせた。前半最後は、幸田と大瀧、村治による《サウンド・オブ・ミュージック》。耳馴染みのあるメロディーで、ステージと会場の一体感が増した。

後半戦は、出演者たちが歌舞伎のように板付きで、入れ代わり立ち代わり“喜怒哀楽”を表現した。

“喜”の音楽、J.シュトラウス2世〈春の声〉に合わせるのは、日本舞踊・藤間礼多の淑やかな舞。ワルツの調べにのって突如ステージに現われたかと思うと、最後は蝶々のようにひらひらと、雅な余韻を残しながら去っていく。“怒”は、長唄《船弁慶》に合わせて、小尻健太がいきり立つ。壁に投影された平知盛の巨大な亡霊が、もくもくと増幅する怒りの感情を思わせた。“哀”を表すロドリゴ《アランフェス協奏曲》の物哀しいギターの調べから一変、“楽”では上野が軽快にサクソフォンを奏でる中、客席の扉から入場した小尻がバントマイムのような動きでステージへと近づいていく。そのコミカルな様子に、会場から笑いが起こった。

アンコールは出演者総出で、松本俊明《ドラリオン》より〈Le ciel〜空〜〉。最後に田中傳次郎の太鼓と「ヨ〜オッ！」という掛け声でスパイスをきかせ、お開きとなった。

これからAOIを創りあげていく芸術家たちの個性溢れるキャラクターを存分に味わえた公演。AOIの今後の展開が益々楽しみになった。

文：野崎裕美(音楽ライター・編集者)

撮影：日置真光

